

---

# 私が雨を嫌う理由

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私が雨を嫌う理由

### 【Nコード】

N4867J

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

いつも雨の日は憂鬱で、なぜか気が滅入った。いつものように学校へ向かう朝、自分の名前を知る青年に出会って、ある出来事を思い出す。私が雨を嫌う理由は。

今日の空は涙模様で、雲になりきれなかった空が堕ちてきて、私を濡らしていく。

水溜まりに映った影が像を結んで私自身を睨んでいた。

今日はきつと嫌な日になるぞ。と警告しているかのようなだった。

傘を畳んで、駅の階段を登っていくと、電車の遅れを伝えるアナウンスが流れてくる。

「またか」

「昨日も遅れたのにな」

そんな声が背後から聞こえてきた。

隣のサラリーマンの肩は濡れていて、私の靴下の片一方もひどく濡れていた。

それでも私はグジュグジュと鳴る靴のままで改札を通り抜けた。ホームでは電車を待っている人がいつもより多かったので少し窮屈だった。

私は傘が人に当たらないようになるべく小さくなって立っていた。そんな事を気にしない人達は無意識にその傘を押し付けてくる。

「嫌だな」

電車に乗ってからもしばらくは、ジメジメとした湿気と左脚の冷たさが不快だった。

しばらくして、降りる駅につくと、私は逃げるように電車を降りた。

駅から学校までは歩いてすぐだけど、こんなに雨が降っていると億劫に感じる。

改札を出ると同じゼミの顔は知っているけれど名前を知らない誰かがこつちを見ていた。

「倉岳さん、おはようございます」

「おはよう、ございます」

いままで声をかけられたことは無かったので、少し驚いた。

「先週の発表、すごかったですね」

「はあ」

私は先週、発表をする機会があつて彼はその事を覚えていたよう  
だ。

「たぶん、前回の発表では一番完成度が高かったように思いますよ」

「そんな、たいしたことないですよ」

「とくに、終わりの所の持論が良かった気がします」

「そうかな」

そんな風に話をしながら歩いていくと、すぐに教室についた。

まだ、誰も来ていないようだったので彼と世間話をしていた。

「ドイツ語のテストの成績、どうでした？」

「ぎりぎりで、落ちなかったのが不思議な位だよ」

「そうですかあ」

その日は結局、出席したのは二人だけで、おまけに発表担当者が  
来なかったので、先生の機嫌は最悪だった。

やっぱりこんな雨の日に来るんじゃないかった。

そう後悔し始めていた。

授業が終わる頃には、濡れていた靴下は乾いていて、雨も小降り  
に変わっていた。

次に授業があるというので、唯一授業に来た彼と別れて図書館  
へと向かった。

とくに用事も無かったが、せっかく学校に来たので勉強しよう  
と思ったのだ。

図書館に入って右奥のいつもの席が他の人に取られていたので、  
しかたなく二階へ向かった。

すると、そちらもいっぱいで座る席が無かった。

雨だから、いつもより多いのか。それともテストが近いのも原因  
の一つだろう。

私は荷物を持ったまま所在無く書庫をうろついていた。

居場所が無いのに私は何をしているんだろう。そんな風になん  
か惨めになった。

普段は見ない短歌の雑誌をパラパラと眺めていると、午前中にあ  
った彼の事を思い出した。

名前は何だったかな。

そもそも私はいつ名乗ったんだろうか。

いつもなら気にしない事だったが、なぜか気になっていた。

やっと座れる席を見つけた頃には授業が終わっており、お昼の時  
間になっていた。

私は構わずに、手提げ鞆を机に置いて、倒れ込んだ。

居場所を見つけたにも関わらず勉強する気にはなれなかった。

私はノートを開けたり閉じたりしていたが、いっこうにペンは進  
まない。

「また会いましたね」

私がだらし無く、机に倒れ込んでいると後ろには彼が立っていた。  
こんな端っこの席に居ても見つけ出すなんて目敏いな、とも思っ  
た。

「どこか座れる所は無いかなと思ったんですけど、なかなか無いで  
すね」

「ああ、雨だから」

「はい」

断る理由が無かったので隣りの荷物を退けて座れるようにした。

「ありがとうございます」

「いえいえ、ところで名乗った事あったかな」

すると彼はしばらくキョトンとした顔をして、こう言った。

「ああ、やっぱり覚えてなかったみたいですね」

「すみません」

「いや、そうじゃないかと思ってたんですよ」

彼は鞆から何かを出す訳でもなく、ただ動きを止めて、私の方を  
見ていた。

「実は三回生の時に、倉岳さんから傘を借りたんですよ」

「え？ 本当に私ですか？」

「間違いないですよ。たしかに倉岳さんでしたから。それで、傘を返しに行ったら要らないって言うから」

「全然、覚えてないよ」

事実、そんな記憶はなかった。この男はきつと誰かと勘違いしているに違いない。

「あの日も確か、今日みたいに朝から雨が降っていて、私も傘を持ってきたんですが、誰かに持っていてしまわれて、それで困っていたんです」

彼は昔の事を思い出しているようだった。

「そしたら倉岳さんが、傘ないなら使えって渡してくださって」  
彼が語る自分の姿はまるで自分じゃないかのようにだった。

「次の日に返そうと思ったら、雨が降ってないのに傘なんて要らないってのはつきり言われて」

「まあ、そうだろうな」

私が言いそうな事だったが、記憶にはない。

「それで倉岳さんの事はずっと覚えてました」

「なるほど、全く覚えてないや」

彼は残念そうな顔をしていた。

「あの日、倉岳さんはどうやって帰ったのか、気になっていたんです」

「そういえば、そうだね。二本傘を持っていた訳じゃあるまいし」

そう言って、ふと私はある事を思い出した。

そうだ、私はあの時、確かに二本の傘を持っていたのだ。

その日、私は授業が無かったにも関わらず、学校に来ていた。

先輩が傘を持っていかなかった事に気付いたからだ。

一つ年上の先輩は、その頃大学院の試験勉強に忙しく、夜も遅い事が多かった。

別に義理があつた訳ではないが、電話で持ってきて欲しいと言われて持っていた。

実はほんの少しだけ先輩に気があつたけれど、それは憧れに近い感情だったので、あまり気にしないようにしていた。

そんな私の事を知つてか知らずか、先輩は私の事を上手く利用し可愛がつてくれていた。

それでいいと思つたし、それ以上の関係を望んだ事もなかった。だから私は、本当に何も考えずに傘を持って学校に向かった。

だが、先輩はいつまでたつても待ち合わせ場所には現れず、校門の前で誰かの車に乗つていった。

私は傘を差しながら、もう一本の傘が濡れないように抱えていたのだ。

そんな事はすっかり忘れていた。

けれど雨の日が嫌いになつたのは、あの日濡れた靴下の不快感を今でもどこかで覚えていたからかもしれない。

次の日から、私は何事もなかったように先輩と接していたし、その事を思い出す事も無かった。

けれど私は悲しかった。そして淋しかったのだ。

先輩は大学院の試験に落ちて、この町を去つていった。最後にお別れ会をやつたが、あの日の事は思い出さなかった。

「そうですか、あの傘にはそんな意味があつたんですね」

私はあまり私情を込めずにその日の事を話した。

「すっかり忘れていたなあ」

あまり良い思い出じゃなかった。でも何となく悪い気はしなかった。

少なくとも理由なしに雨の日を嫌うよりはマシだろう。

「あ、雨止んでますね」

見ると、図書館の天窓から日差しが降り注いでいた。

「傘が要らなくなつたな」

私がそう言つと、彼も頷いた。

「ところで、名前を聞いてもいいかな？」

「はい」

彼は何故か嬉しそつだつた。やはり名前は聞いた事のない名前だつた。

これから雨の日は彼の事を思い出さう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4867j/>

---

私が雨を嫌う理由

2010年10月8日15時13分発行